

李登輝生誕100年を迎えて（下）

日本台湾交流協会台北事務所広報文化室長 早川 友久*

1月号に続き、光栄にも紙面をいただく機会を得た。今号では、世に知られる政治家としてではなく、家族という切り口から李登輝という人物を映し出してみたい。

李登輝の人生を振り返るとき、戦争のことを抜きに語ることはできない。ウクライナやイスラエルの戦火が、現地の人々の生活を大きく変えていくのと同じく、戦争は李登輝の人生を変え、家族にも、心の内にも大きな影響を与えたからである。

一、台北高校の愛国少年

手元に一枚の新聞記事がある。日本統治時代に台湾で最大の発行部数を誇っていた「台湾日日新報」が昭和18年6月28日に報じた紙面の一部で、見出しには「私も志願する 信念を語る岩里君 台北高校」とある。岩里君とは当時、台北高等学校3年生だった岩里政男、つまり青年時代の李登輝の日本名である。私がこの新聞記事を見つけたのはほんの偶然だった。台湾大学在学中、台湾史の授業でレポートを課されたが、テーマは自由だった。何か自分でテーマを設定して小論文を書けというのである。図書館には、電話帳のような厚さの「台湾日日新報」縮刷版が数十年分も並んでいたが、当時すでに縮刷版がデジタル化されており、国家図書館や台湾大学図書館ではキーワードによる検索が可能となっていた。レポートの課題を前に、テーマ探しに呻吟する私が、ふと思いついて何とはなしに李登輝や、兄の李登欽の日本名を入力したところ、見つけたのがこの記事だっ

たのである。

記事の一部を引用してみたい。

「今や臺灣にも陸海軍の特別志願兵制度が施行され、私も大學の法科を出たら志願をしたいと父母にも語つてゐるのであるが、軍隊の制度は吾々が自己の人間を造る所であり、色々と苦しみを忍んで自己を練磨し明鏡止水の窮地に至るに是非必要な所だと信じてゐる。近く内地に行くこととなつてゐるが内地に行つたら日本文化と結びつきの深い禪の研究をしたいと思ふ。」

李登輝は昭和18年8月、戦時繰上げにより半年早く台北高校を卒業したため、卒業直前ともいえる時期だった。なぜ当時、台湾最大の日刊紙が李登輝を取り上げたのかについては推測の域を出ないが、昭和18年は、苦しい戦況を打破するため、台湾における陸軍志願兵制度が前年に実施されたのに続き、海軍でも志願兵制度が実施された時期と重なる。そのため、当時台湾総督府の「御用新聞」的な側面を有していた台湾日日新報が、国威発揚のため、本島人（当時、日本本土出身者を内地人と呼称したのに対し、台湾出身者をこう呼んだ）学生である李登輝を紙面に取り上げたのではないだろうか。後年、この記事と、後述する李登輝の兄を取り上げた記事を李登輝本人に見せたことがあるが、李登輝は「そんなことがあったような記憶はあるが全く覚えていない」とのことであった。

* 本稿の内容や意見等は日本台湾交流協会の公式見解を示すものではなく、全て執筆者個人の経験に依拠する内容及び意見である。また、本稿中の人物の組織名・肩書きは当時のものである。なお、筆者は2012年から9年間、日本人秘書として李登輝元総統に仕えた。

二、海軍志願兵の兄

昭和18年、台湾で海軍志願兵制度が実施されると、当時、岩里武則と名乗っていた李登輝の兄、李登欽も志願して合格している。李登輝へのインタビュー記事が報じられてからおよそ3か月後の9月22日、李登欽にインタビューした記事が台湾日日新報に掲載されている。

「宿願實現、感激に戦く」と題された記事によると、李登欽は妻と幼い子供二人を残して海軍に志願している。また、「(前略)銃後にあつて治安保護の戦士としてお國に盡すこともご奉公ですが、出来る事なら第一線でお國のために華華しく活躍したいと思つてをりましたほんとうがそれが本當になりました(後略)」と心境を吐露している。

李登輝にとって二つ上の兄、李登欽は「剣道をやらせても野球をやらせても一番。地元の青年団でもリーダーのようなことをやっていて、自分にとっては憧れであり、尊敬してやまない兄だった」という。小さい頃は内気だった李登輝が近所のガキ大将にいじめられていると、駆けつけて守ってくれたこともある、仲の良い兄弟だったようだ。

海軍志願兵に合格し、機関科一等兵として台湾南部の高雄で訓練に明け暮れていた兄から「そろそろ出発する」とハガキを受け取った李登輝は、高雄まで会いに行き、「二人で何をすともなしに高雄の街を歩きながらずっと話をしていた。そんなことしか覚えていない。写真館で、二人で記念に写真を撮ったのが最後になった」と李登輝は言う。李登欽は昭和20年2月、フィリピンのルソン島で散華し、現在は靖国神社に祀られている。兄弟は本当に仲が良く、弟は兄を慕っていたのだろう。日本からの来客が「靖国神社の遊就館(境内にある記念館)でお二人の写真を見ました」などと言おうものなら、李登輝は兄の思い出をとつとつと語り出し、ときに目に涙を溜めることも少なくなかった。

三、父と兄

戦死の知らせを受けてはじめて、李登輝の家族は李登欽がフィリピンにいたことを知った。あの時代、作戦の秘密を守るため、家族にさえどこに

出発するか知らせることが出来なかった。しかし、兄弟の父である李金龍は戦死の通知を受け取ったものの、李登輝いわく「親父は兄の死を信じていなかった。優秀な兄のことだから、うまく生き残って現地の女性でも嫁にして暮らしているのではないか」などと話していたという。そのため、李家には兄を弔うための祭壇もなければ位牌もない。父は最期まで息子の死を信じず、李家ではこの話題はタブーだった。

だからこそ、であろう。2007年6月、総統退任後に初めて東京を訪れたとき、李登輝は靖国神社を参拝することにこだわった。このときの訪日は、芭蕉の「おくのほそみち」を探索したいという積年の念願をかなえるものだったが、他方で、総統職を退いてから初めての東京滞在であった(それまでの訪日は関西や北陸、名古屋などに限られていた)。李登輝は、いつか日本へ行ったら靖国神社を参拝したい、という意向をインタビューなどを通じて漏らしていたため、訪日前から日台のメディアが憶測報道を繰り返していた。一部では「なぜ総統になる前に靖国神社に行かなかったのか」と非難するような声もあったと聞く。実際、李登輝は副総統だった1985年、蒋経国総統の代理として中南米を訪問した帰途、東京でトランジットして数日滞在している(このとき、李登輝はのちに生涯の友人となる、当時、東京外国語大学教授だった中嶋嶺雄と初めて顔を合わせる)。1980年代、日台間のハイレベル接触は非常に低調かつ目立たず、事実、報道を見るかぎり李登輝の訪日に対して中国は何ら反応を示していない。この滞在の際に靖国神社を参拝する機会があったと思われるが、李登輝に直接尋ねたところ「あの頃、兄貴が靖国に祀られているなんて知らなかった」のだそうだ。

訪日への出発前、記者に囲まれた李登輝は、「何十年も会っていない兄が靖国神社にいて、弟が東京まで来ている。あなただったらどうするか。その気持ちを記事に書けばいい」と煙に巻いた。訪日の日本側責任者は、李登輝が副総統の頃から意気投合し、総統就任後は日台間の相互理解を深める目的で設けられた「アジア・オープン・フォーラム」で長らく世話人をつとめた中嶋嶺雄だった。

国際教養大学学長のポストにあった中嶋は安倍政権に対して李登輝の靖国神社参拝を打診していたが、サミット出席のため訪独中だった首相の安倍晋三から「Goサイン」が出たのは参拝予定日の直前だったという。安倍の死後に出版された『安倍晋三回顧録』には、安倍側から見たこのときのくだりが出てくる。

私は、「総統のお気持ちに添って、参拝してもらえればいいじゃないか」と一切の制約を付けませんでした。（中略）

私は、彼から靖国に対する思いを伺っていました。「自分の兄は、大日本帝国海軍の軍人だった。私も学徒出陣で出征し、日本陸軍の軍人として命を懸けた。戦争当時は日本人だったんですよ、安倍さん。そして兄は南方で戦死した。当時、靖国に祀られるというのは、兵士と国の契約だった。当然、私の兄は、靖国に神として祀られている。私はそう思っています。私が兄と会えるのは、靖国神社だけです。だから私は靖国で兄と再会する」という内容でした。こんな話をされたら、靖国に行かないでくれ、なんて言えるはずがないでしょう。

同じく安倍の回顧録によると、李登輝が総統を退任してからの訪日は「日本政府が穏便な言動をお願いしていた」という。ただ、1994年に同期当選の岸田文雄らとともに、自民党青年局の訪台団メンバーとして総統府で初めて李登輝と会見して以来、折に触れて李登輝との交流を深めてきた安倍は、李登輝の気持ちを理解していたのだろう。李登輝は2020年7月に世を去り、安倍も翌年7月に凶弾に倒れた。当時、日本台湾交流協会台北事務所代表だった泉裕泰は「私たちは日台関係における二つの大きなエンジンを失った」と嘆いたが、まさに精神的に強く結ばれた日台のリーダーが失われたと嘆息せざるを得ない。

宮司の南部利昭の案内で昇殿参拝を終えた李登輝は、ホテルオークラに戻ったところで記者団からのインタビューに答えた。「父はずっと兄の死を信じていないため、李家には兄を祀る祭壇も位牌もない。そのかわり、何十年にもわたって靖国

神社が兄の霊を慰めてくれてきた。だから私はどうしても李家を代表してその御礼を靖国神社に言いたかった」と、時折り声を詰まらせながら記者に対して語っていた李登輝と、傍らで涙を拭う夫人の姿を昨日のこのように思い出す。

ただ、戦争を巡る想いは、同じ時代を経験したといっても男女ではまた異なるようだ。後年のある日、李登輝夫妻とソファで他愛もない話をしていた時のことだ。日本からの来客を終え、夫人も二階から降りてきてお喋りに加わっていたのだが、夫人が私に『永遠の0』という小説を読んだかと尋ねた。聞くと、女学校時代の友人に進められ、面白いと一気呵成に読み切ったそうだ。「でもね、主人にいくら勧めてもこの人は読まないのよ」と言う。すると李登輝は仏頂面で「私は本当の戦争に行ってきたんだ。そんな小説など読まなくて戦争がどんなものかよく知っている」と。実際、李登輝は昭和20年3月の東京大空襲も経験しており、口では言い表せないような戦争の悲惨さや理不尽さも経験しただろう。夫人もまた「銃後」の生活は経験しているが、それでもやはり実際の戦場にいたことがなければ分からない秘めたものを李登輝は胸に抱いていたのではないかと感じさせられる一幕だった。

四、一枚の家族写真

李登輝が台北高校を卒業し、京都帝国大学に内地留学する直前のこと。家族で撮影した一枚の写真がある。李登輝の両親と祖父、そしてすでに結婚していた兄の妻と幼い子供二人がおさまっている。前述したとおり、兄は海軍志願兵としてフィリピンで戦死し、母も戦後まもなく病気で世を去った。兄が残した子供たちは李家が面倒を見て、戦後は李登輝夫妻の家に居候していたこともあったという。戦前戦後を通じて李登輝夫妻の手元に残された写真は、国史館が編纂した「李登輝総統写真集」に収録されているが、あるとき、これらの写真を眺めていた李登輝がポツリと漏らした。「私以外、ほとんど癌でやられてしまった」。聞くと、李登輝から見れば子供の世代にあたる甥や姪たちもみな癌に命を奪われてしまい、写真に写っている李家の人物のなかで残っているのは李登輝

だけだという。

また、李登輝と夫人の曾文恵の間には三人の子供がいた。しかし、長男の憲文は李登輝が台湾省主席だった1979年、鼻腔癌で亡くなった。32歳の若さで、李登輝夫妻の初孫にあたる遺児はまだ生後7か月であった。当時、まだ台湾に残されていた統治機構である台湾省政府は台湾中部の南投県に置かれていた。台湾高速鉄道が開通した現在でも台北から出かけるには相応の時間がかかるが、当時は車両で数時間をかけて往復していた。李登輝に敵対する勢力のなかには、愛息が入院する台北に少しでも早く帰りたいであろう李登輝に嫌がらせをしようと、故意に省主席に対する質疑を長引かせたりするような、人倫にもとる輩もいたと、李登輝とともに仕事をしていた人物から耳にした。若くして世を去った息子が霊安室に移されるとき、冷たいストレッチャーに載せられることを不憫に思った父李登輝は、息子の亡骸を抱いて一步步運んだという。

李登輝自身も癌に二度侵されている。2011年には大腸癌が見つかり、90歳を目前にした高齢ながら摘出手術を受けた。また、その数年後には上唇の横に何やら腫瘍のようなものができているので念のために検査したところ、ごく初期の皮膚癌だった、ということもあった。李家には癌に侵されやすい体質があることを李登輝自身も実感していたのであろう。自身が大腸癌の手術を受けるにあたり、根っからの学者肌である李登輝は書籍や論文を取り寄せて勉強を始めた。そこで、台湾も日本と同じく、死因の第一位が悪性腫瘍であるが、その治療や手術のためには高額な治療費が必要であること、台湾では最先端の癌治療装置はまだ導入されておらず、治療を受けようと思えば日本へ行かなければならないことが分かった。

例えば、当時まだ日本でも実用の一歩手前だったホウ素中性子捕捉療法（BNCT）や重粒子線、陽子線を用いた治療である。1月号で言及したとおり、李登輝の政治哲学は「常に国家と国民のことを頭の中に」であり、それは総統を退任してからも変わることはなかった。癌を克服した李登輝は早速に日本の人脈を使い、京都大学や筑波大学の専門家に台湾へ来てもらい、栄民総合病院の医

師たちを集めてのフォーラムまで開催してしまっただけだ。さらには、2015年に訪日した際、実用の途に就きつつあったBNCTを運用している現場を見たいと、福島県郡山市の南東北病院での視察を組み込んだことも、導入に際して莫大な資金が必要なことから、価格交渉のために某大企業の役員にホテルへ来てもらい、口添えをしたことさえもあったのである。

李登輝がすでに世を去った2023年5月、栄民総合病院に、日本企業製の重粒子線癌治療施設が導入され、記念セレモニーが行われた。セレモニーは蔡英文総統も出席して盛大に催されたが、上述のとおり、台湾に最先端の癌治療装置が導入されるにあたり、その陰には李登輝の目に見えない尽力があったことを知っていた日本台湾交流協会台北事務所代表の泉裕泰が祝辞のなかで李登輝のことに言及してくれたことは非常に有り難いことであった。

五、沖縄への思い

確か2017年の後半だったと記憶する。沖縄県糸満市にある平和祈念公園の中に「台湾出身戦没者慰霊碑」の建立計画が進められており、ぜひ李登輝に揮毫をお願いしたいという話が舞い込んできた。聞けば、平和祈念公園には日本人や朝鮮人の戦没者慰霊碑はあるものの、台湾出身者のものだけが建立されていないのだそうだ。その話を聞いた李登輝は一言つぶやいた。「行きたいな」。そばにいた秘書長が「じゃあ行きましょう」と即答した。ここから、李登輝の最後の訪日となった計画が動き出したのである。

驚いたのは揮毫を依頼してきた側だった。ぜひ揮毫をお願いしたいとお願いしたら李登輝自身が「行きたい」と言い出したのだから。とはいえ、先方も異存のあるはずがない。私も李登輝の秘書になり、数えてみれば5回目の訪日であり（直前で取りやめにしたのものも含む）、肝もすわってきていた。早速に私が台北と那覇を出張で行き来し、宿泊ホテルや移動、滞在中のスケジュールなどが次々と決められていった。

建立された慰霊碑の除幕式は6月24日に決まった。本来であれば沖縄の慰霊の日は、首相も

出席する沖縄全戦没者追悼式が挙行される23日だが、同日に行くと出席できない人も出てくるということで一日ずらすことにしたのだ。李登輝夫妻は22日に沖縄に到着し、地元の華僑団体による歓迎会などに出席したが、やはり年齢による体力の衰えは隠せず、過去の沖縄訪問では精力的に行った視察などは組み込まず、なるべくホテルの部屋でゆっくり過ごしてもらうことにしていた。あまり外へ出なかったことがメディアの関心を引き起こした面もあったのだろう。首相の安倍晋三が沖縄全戦没者追悼式出席のために訪沖するタイミングで李登輝も同じく沖縄本島に滞在していたため、安倍が李登輝と面会するのではないかと探りを入れる電話が何度も私の電話に入ってきたが、沖縄で二人が会うことはなかった。

実のところ、このときの訪日実現は紙一重だった。訪日の1か月ほど前、李登輝が体調を崩して入院してしまったのだ。過去にも、半分だけ辿った「おくのほそみち」の残りを歩くための訪日がかんりの段階までお膳立てされていたのに、体調を崩して取りやめになったこともあったし、第一次安倍政権が発足して間もない時期に「いま自分が訪日して安倍さんを困惑させることは本意ではない。私は120パーセント、安倍さんを応援したいからこそ日本には行かない」と直前にキャンセルしたこともあった。その当時と比べても年齢を重ねている。私はこのときも訪日は取りやめせざるをえないものと思っていた。ところが、病院で静養する李登輝は「やめる」とは言わなかった。むしろ「どうしても行きたい、いや、行かなければならないんだ」と鬼気迫る表情で秘書長や私に言うのである。李登輝いわく、「自分も兄貴もあの戦争に行った。あまつさえ、兄貴は戦死している。そしてあの当時、多くの台湾人が、日本のためお国のために命を捧げたんだ。だからこそ、自分はどうしても沖縄へ行って戦死した仲間たちを慰霊しなけりゃならないんだ」と。

幸いにもその後、病状は好転した。毎度のことだが、心臓が専門の担当医も同行しての訪問であ

る。とはいえ、私から見れば、「気力」で出かけた沖縄であった。足腰は少しずつ弱くなっており、今までであれば、なるべく公の場では車椅子に乗ることは控えていたのだが、このときは空港内での移動に車椅子を使った。沖縄滞在中のハイライトは「為國作見證」と李登輝自らが揮毫した慰霊碑の除幕式だったので、それ以外の日程はすべてキャンセルになっても、除幕式に出席できれば良しとさえ考えていたが、結果的には、ところどころ疲れを見せたものの、無事にすべての行事にも出席でき、私もホッと胸をなでおろした。最後の夜、すべての行事を終えて居室に戻ると、さも疲れたかのように李登輝と夫人の曾文恵はソファに腰を下ろした。李登輝の肩に頭を預けるかのように寄り添い、曾文恵が何やら話しかけている。あまりの睦まじさに、私たちは近くに寄るのもはばかられ、まるで年若い恋人同士のような二人の後ろ姿をそっとカメラにおさめたのだった。

六、おわりに

二度にわたって書かせていただいた拙文は、政治の面からでも歴史の面からでもなく、ただ李登輝に仕えた日本人秘書の目から見た人物像を、いくつかのテーマに分けて書き出したものである。李登輝が台湾や日本のみならず、国際社会においても広く尊敬され、「台湾民主化の父」であり「哲人政治家」として称賛されていることは言うまでもないが、政治家李登輝はまた家庭に戻れば一人の夫であり、父であり、祖父であり、また息子であり弟であった。日本では今もなお尊敬の念を抱く人々が少なくない李登輝だが、拙文が李登輝という人物により親近感を持つ一助となってくれたら、と願い筆をとったものである。文中で述べたエピソードなどの多くは、筆者が直に李登輝やそのご家族、関係者から耳にしたものばかりだが、文中に誤りや認識不足があれば、それはすべて筆者の責任である。改めて、不世出の李登輝という人物のそばに仕えた幸福を噛み締め、その経験を読者の方々と共有できることを喜びたい。